

「普請中」のベルリン

——一八八七年・八八年当時の森鷗外第二・第三住居環境考——

神山 伸弘

はじめに

森鷗外は、周知のとおり、ドイツ留学（一八八四年～八八年）の最終盤にあたる一八八七年・八八年にベルリンに長期滞在している。その滞在先については、『独逸日記』に明確な記述があり、一八八七年四月十六日にベルリンに着いた後、まず、同月十八日にはマリイ街 (Marienstrasse) 三二番地のステルン (Stern) 夫人のところに下宿を定め、その後、同年六月十五日には僧房街 (Klosterstrasse) 九七番地のケユデング (Kaeding) 宅に、翌年四月一日には大首座街 (Grosse Praesidentenstrasse) 十番地のルッシュ (Rusch) 夫人宅に転居している⁽¹⁾。

このうち第二の下宿への転居理由は、『独逸日記』で詳細に述べられ、

端的には、第一の下宿のステルン夫人とその姪トルウデルを嫌ったためであるとされている⁽²⁾。これにたいし、第三の下宿への転居理由は、『独逸日記』において必ずしも明示的でなく、このため、小堀桂一郎は、鷗外が第二の下宿を気に入っていたこと、それと第三の下宿が距離的に近いこと、「聯隊勤務のために住居を勤務先の近くに移したという状況ではない」として、「転居の動機がはっきりしない」と評価している⁽³⁾。

鷗外がベルリンに在住した当時の下宿の位置とその環境を明確にすること、あるいはそれぞれの転居理由をより深く理解することは、鷗外のひとと作品を理解するうえで必要不可欠なことであろう。そして、この場合留意すべきは、鷗外が滞在した当時の実情にできうるかぎり迫っていくことだと思われる。しかしながら、これは、言うに安くも、そこに

は百年以上の歳月が横たわり、資料上の制約も多く、なかなか満足のいくレベルで達成できる課題でないことも確かである。ただ、そうはいっても、東西ドイツ統一後の現在では、旧東ベルリンに存在した資料を容易に参看できるようになっている。にもかかわらず、こうした好条件をこの種の研究が活用しているとはいいたい面もあるようである。

われわれとしては、『舞姫』などの作品の舞台たる鷗外滞在時のベルリンを理解するための基礎的な作業の一環として、ベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin)、『ベルリン・ランドスアルヒーフ (Landesarchiv Berlin)』、ベルリン研究センター (Zentrum für Berlin-Studien) などに所蔵される諸資料、および公刊著作をもとに、とくに鷗外の住んだ場所がどのような環境に成り立っていたのか、議論を試みたいと思う⁽⁴⁾。ただ、第一の下宿については、篠原正瑛がすでに多くを論じており、また現在、ベルリンで森鷗外記念館となつて評価がそれなりに定まっていることから、これについては割愛することをお許しいただきたい。

一 僧房街は遠い

冒頭で述べたように、鷗外は第二の下宿に転居した理由をおもにステルン夫人らとの不和に求めているから、「公には衛生部に近きが故なり」という表向きの釈明をわれわれは概して軽視する傾向にあると思われる。鷗外の明言によるので、これが立前なのは疑問の余地がないのだが、しかし、本音とされる人間関係上の問題だけに注目するのは、鷗外が生活したベルリンの空間をまったく背景に斥けてしまう虞がある。

鷗外は一八八七年四月二〇日にコッホ (Koch, H. H. Robert) に会い、その研究指導を受ける約束をしている。このさいどこでコッホに会ったか、その場所は『独逸日記』に記されていないが、僧房街三六番地にある衛生部 (Hygienische Institut) とみるのがきわめて自然である。当時コッホがその所長として執務していることが最大の理由だが、コッホとの相談後「大陸骨喜店 Café Continental に至る」という日記の記述も傍証となる。このウィーンナー・カフェは、アレキサンダー広場 (Alexanderplatz) 駅近くのキヨオニヒ街 (Königstrasse) 三三番地に所在し、衛生部からほどない位置にある。衛生部で話をし、さらに近場の喫茶店で歓談する、というのは自然の成り行きというものだろう。

鷗外はその後のこの衛生部に足繁く通うことになるが、第一の下宿から衛生部までの道のりは、もつとも合理的なルートをとっても片道二・七キロメートルあり、徒歩で行く場合、分速八十メートルで三十三分はかかってしまう。これをどう評価するかが、〈公の理由〉をまともに受けとめるか否かの分かれ道となる。たまたの散歩であればそれはいい距離かもしれないが、毎日の往復となればなにか乗り物を使いたくなる距離だと、われわれは考えたい。

その乗り物だが、第一の下宿近辺のカル、スプラッツ (Karlsplatz) ——『独逸日記』にたびたび登場するトヨップフェル客館 (Toepfer's Hofe) はこれに面する——に鉄道馬車停留所があり、これを利用するのが至便である。伝一八八八年のベデカーの地図⁽⁸⁾には、カル、スプラッツから仏特力街 (Friedrichstrasse)、オラニエンブルガー街 (Oranienburger-



図1 Situations-Plan, Haupt- und Residenz-Stadt Berlin und Umgegend, 1888. (部分・合成)

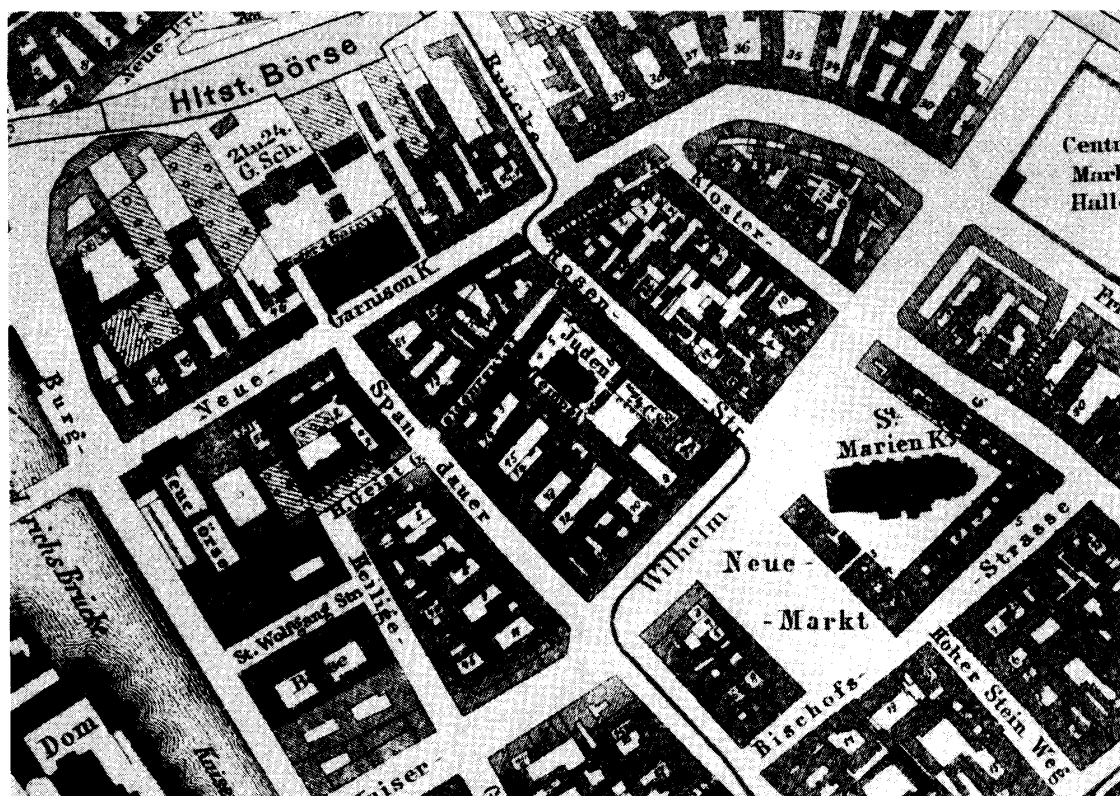


図2 第2下宿周辺(図1部分拡大)

(Rosenstrasse) シュパンダウアー街(Spandauerstrasse)に抜ける路線が記されている。⁽⁶⁾これが利用できるならば、衛生部裏手のキヨオニヒ街ないしはモルケン市場(Mollkenmarkt)の停留所で下車できるわけだから、通学にも無理がないといえる。したがって、もしそうであるならば、〈公の理由〉を聞いた者は、そこになにかしら胡散臭いものを感じるはずである。ここからでも通えるではないか、と。

しかし、この地図には、一八八七年当時存在しない路線も記されており、問題の一八八七年の像を結ぶには、それは適切な資料といえない。⁽¹⁰⁾むしろ、鷗外自身が所持したベルリン案内書『医学都市ベルリン案内』の記述を信頼すべきかと思われる。それによると、カル、スプラッツを通りオラニエンブルガー街に向かう路線は、ベルゼ(Borse)駅停留所を終点とする。⁽¹¹⁾そこから先、ローゼン街方面にまで伸びる路線はこの案内書に存在しない。衛生部裏手まで鉄道馬車で行こうとするなら、ハアケ市場で別路線に乗り換える必要が出てくる。しかし、ここまで来れば、衛生部まで徒歩十分程度であるから、乗り換えに時間を費やすよりは、あとは歩いたほうが簡便かもしれない。いずれにせよ、第一の下宿でもっとも至便なカル、スプラッツからの鉄道馬車利用が中途半端なものではなかったというべきであろう。

このため、次善の策を考えると、市内鉄道(Stadtahn)を利用するといふことがある。第一の下宿にもつとも近い仏特力街の駅からアレキサンダー広場駅へは、所要約六分、列車は約十分間隔で動いており、三等の運賃は鉄道馬車の初乗り運賃と同等の十ペニヒとみられるから、手輕⁽¹²⁾

に利用できる状態にあった。もともと、第一の下宿から仏特力街まで、アレキサンダー広場駅から衛生部までは、いずれも徒歩で五分程度ある。待ち合わせ等も含めれば、時間的には全体を徒歩で通すのとあまり変わらなくなってしまう可能性もある。とはいえ、同程度の時間で済むのであれば、距離が距離だけに、体力を温存するため、やはりこうした交通機関を利用したくなることかと思われる。

してみると、いずれにせよ、種々の交通機関を利用して、第一の下宿から衛生部へはそれなりの「旅」であったわけである。この事情が理解できている者なら、鷗外の申し立てる〈公の理由〉を素直に受け止めたであろう。そして、鷗外自身にも、第二の下宿への転居はそれなりに旨味があったのである。

二 「悪漢淫婦の巢窟」の再開発

鷗外は『独逸日記』で第二の下宿のある僧房街を「悪漢淫婦の巢窟」として前評判があったと記している。⁽¹³⁾ 当時の公共事業省 (Ministerium der öffentlichen Arbeiten) の『建設新聞』では、次のように述べられている。「狭隘なノイエ・フリードリッヒ街 (Neue Friedrichstrasse) に平行しそこから平均十四メートル離れて《王壁沿い》 (An der Königsmauer) という小路が伸びていたが、この小路は、あるところでは幅三メートルにも満たず、昔からとても粗野な風情で売春が根付いていたところである」⁽¹⁴⁾。一八七五年の地図を見るかぎり、僧房街周辺が人口密集地帯だったことだけは確認できるから、事情の大きな変化がないとすれ

ば、鷗外が住んだ当時も同様の混雑を呈していたことだろう。

また、これに関連して、鷗外の第二の下宿近傍に《小ユダヤ人館》 (Kleiner Judenhof) があったとされ、⁽¹⁶⁾ 鷗外とユダヤ人との関係が研究者

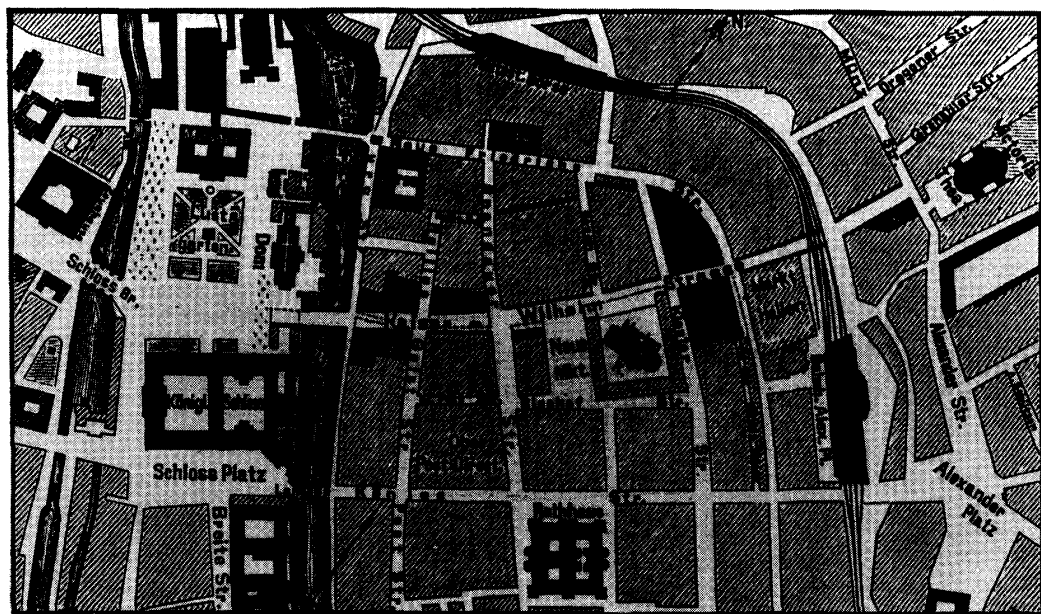


図3 ベルリン、カイザー・ヴィルヘルム街の開発 (計画図、1885年)

のあいだでも取り沙汰されている。⁽¹⁷⁾ たしかに、一八八八年版のベルリンのもっとも詳細な地図を見るかぎり (図1)、第二の下宿と目される位置の背後に《小ユダヤ人館》があるかのように見える (図2)。⁽¹⁸⁾

これらを総合すると、鷗外の住んだ僧

房街が、密集する人びと、ユダヤ人、さらには犯罪者と売春婦で交錯する坩堝としてイメージされることになる。

しかしながら、こうしたイメージは、鷗外の滞在時にもそのままあったと信ずるとなると、まったくの誤解というべきものになってしまう。

このことは、第二の下宿にかんし、鷗外が『独逸日記』で「余が家の新築に係り⁽¹⁹⁾」と記したことに深くかわる。当時のベルリンに思いをはせる余裕がなければ、これは、所有者の希望によって独自に行われた一つの建物の新築にすぎないと思ひ込むだろう。しかしながら、こうした理解は当時の実情とまったく合致しない。すでに川上俊之が指摘しているように、⁽²⁰⁾ 僧房街とノイエ・フリードリッヒ街によって囲繞されたある一区画全体を破壊し再開発した結果、鷗外の下宿の建物が成立した。したがって、鷗外がそこに住んでいたころは、この再開発によって、「悪漢淫婦の巢窟」も《小ユダヤ人館》も基本的に一掃されてしまっている⁽²¹⁾のである。

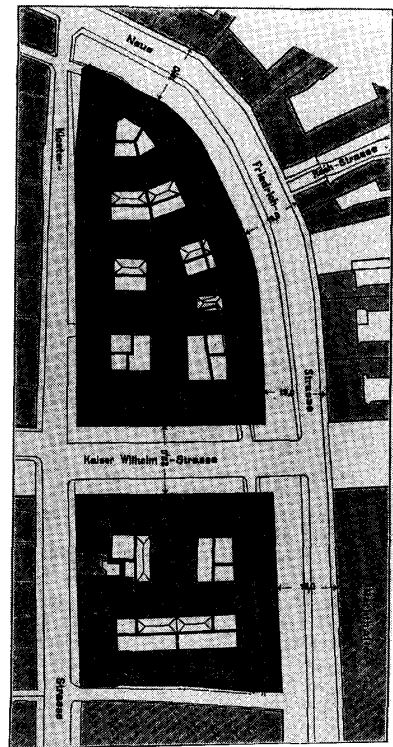


図4 僧房街－ノイエ・フリードリヒ街間の二つの街区配置 (1888年)



図5 僧房街の建設現場 (1885～86年)

僧房街の再開発は、小ブルク街 (Kleine Burgstrasse)、パーペン街 (Papenstrasse) の拡張によるカイザー・ヴィルヘルム街 (Kaiser

Wilhelm-Strasse)の開発の一環として行なわれた⁽²²⁾。この道路開発は、当時過大となっていたキヨオニヒ街の交通量を緩和するため、いわばウンテル・デン・リンデン(Unter den Linden)を東に延伸する形で構想されたものである。この開発行為にかんしては、公共事業省編集の『建設行政中央新聞』にいくつかの記事が掲載されている。そのなかに、開発の全貌を示す略図(図3)⁽²³⁾もある。このなかで、1から6まで白抜き数字がつけられた黒い区画が『カイザー・ヴィルヘルム街建設株式会社』が請け負った建設地域だが、後に鷗外が住むことになる新築の建物は、このうち第四区画に含まれる。この区画と第五区画の街区がどのように配列されたかは、『建設新聞』に見ることが出来る(図4)⁽²⁴⁾。この図のうちⅠと記された部分——判読しづらいので左側上から五番目の区画を見よ——が、鷗外の第二住居にあたる

僧房街九七番地である。

カイザー・ヴィルヘルム街の開発行為は、一八八四年に契約が交わされ、建物群は一八七七年十月までに竣工の予定とされた⁽²⁵⁾。鷗外は新築の家に八七年六月に入居したわけだから、少なくともその建物にかんしては全体計画よりも早く完成したことになる。

ところで、この再開発がいかに徹

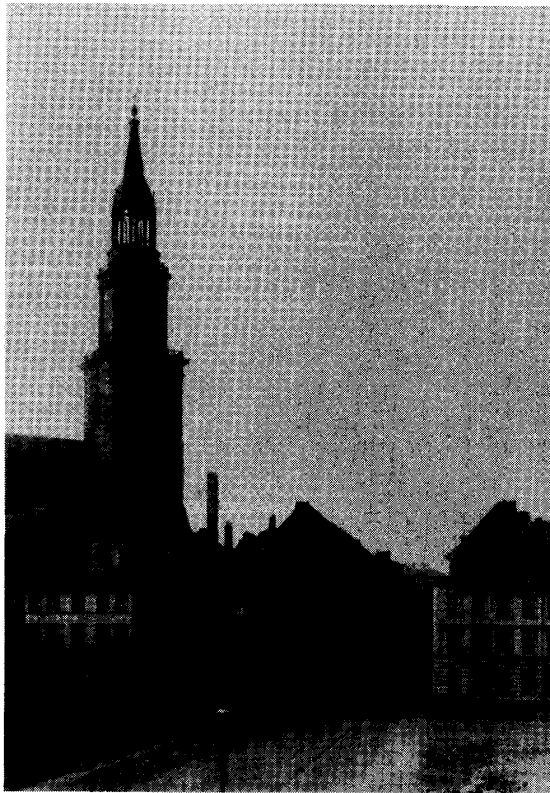


図6 僧房街からマリエン教会を望む(1885~86年)

底的なものであったかを如実に示すベルリン・ランデスアルヒーフ所蔵の当時の写真がある(図5)⁽²⁶⁾。これは、写真家シュヴァルツ(Schwarz, F. Albert)が、ノイエ・フリードリヒ街側の窓から、手前より右手に広がる更地(図3の第四区画)越しに左手の僧房街一から九番地の建物(番地順序は右手より)を眺めて撮影したものである。写真では切れた手前のところに、パーペン街が走っている。そして、この更地の左側こそ、開発後の番地づけで僧房街九六番地から一〇一番地となるところであり、もともと手前が九六番地、その次は中央に右下がりで区画された部分が後に鷗外の住んだ九七番地にあたる箇所である。したがって、左手の屋根裏部屋の窓がある建物群は、鷗外が当時目にした風景といつてよいだろう。

シュヴァルツは、僧房街一から九番地の続きに目を転じ、マリエン教会(Marienkirche)が目に入る写真も残している(図6)⁽²⁷⁾。この写真の手前から中央を直進する道路がパーペン街であり、正面にある横並びの建物が僧房街の西面、そして左手奥にマリエン教会が見える。パーペン街は、僧房街十番地(右手)と十一番地⁽²⁸⁾に挟まれて狭い路地となり、マリエン教会を左に眺めてノイエ・マルクト(Neue Markt)へ

と通じていく。この写真で重要なのは、やはり手前が更地になっていることである。注意深く見れば、左手にも工所用の柵のあることが認められよう。その先が図3でいえば第五区画にあたる箇所である。

さらに、ノイエ・マルクト前からマリエン教会を眺めた当時の写真を示しておく(図7⁽²⁹⁾)。この写真は、ツェットラーらによって「マリエン教会近辺の建設工事」と題され、一八八八年のものと推定されている。仔細に見れば、手前の道路は掘り返された状態にあ



図7 マリエン教会近辺の建設工事 (1888年頃)

り、工所用の台車が転がっている。重大なのは、マリエン教会の正面部分に建物がないことである。

図6の写真からも伺えることであるが、もともとマリエン教会の正面部分には二階ないし三階建の家が建ち並んでいた⁽³⁰⁾。それがこの写真ではきれいに取り壊され、マリエン教会の正面が露呈してしまっている⁽³¹⁾。そして、その左右両側面を、屋根が階段状となった家並みによって挟まれた格好になっている。

この写真が一八八八年のものであることには、それなりの根拠があると思われる。卑見では、まず、最左端の五階建の建物が

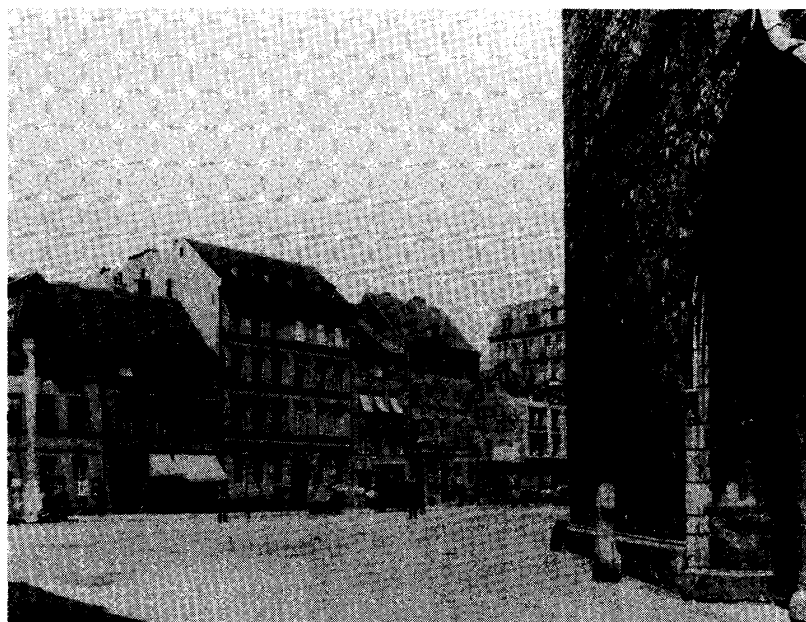


図8 マリエン教会向かいの状況 (1888年)

その指標となると考える。この位置は、再開発後の新番地で僧房街九五番地にあたり、図6でいうと左手に工事柵があつた箇所の建物である。『ベルリン住所録』の一八八七年版によれば、ここを含め一帯はカイザー・ヴィルヘルム街建設株式会社の所有にかかり、居住者がいない状態となつている。⁽³²⁾ところが、翌八八年版にはヴェフナー(Wuechner)という居酒屋が現われる。⁽³³⁾各年版の原稿がいつ締め切られるのかは推測するほかないが、それが前年の半ばだと仮定すれば、一八八六年後半期から八七年前半

期にかけて建物が完成したとみなければならぬだろう。再開発全体の竣工予定が八七年十月であつたことを考えると、工期が短縮されたとしても八六年にまで遡るとは考えにくい。した

がつて、この写真の撮影時期は、早くとも八七年半ばとするのが限度である。また、道路工事そのものは、後述(五)のごとく八八年の鉄道馬車路線工事とみることが出来る。以上から、図7が一八八八年頃の情景を写していると考えうるのである。

鷗外は、一八八八年七月五日にベルリンを離れるから、この図とまったく同様の光景に直面したかどうかは断言できないにせよ、少なくとも当時進行中のカイザー・ヴィルヘルム街の工事をつぶさに見ていたと断じていいと思う。川上は、「ウンターデンリンデンから王宮のそばを通つて古寺〔中略〕へ至る道は、当時隆盛期にあつたプロイセンが都市計画で再開発した都大路である。詩情を感じるよりも道幅が広く〔狭い道でも三六米幅〕清潔な街並みに圧倒される」としているが、鷗外がそこで見たものは「都大路」も「清潔な街並み」もいまだ開発途上の無定形な状態にあつたといわねばならない。

この点を補強するのが、一八八八年の刻印のある図8⁽³⁵⁾の写真である。これは、右手のマリエン教会の入口から、北を眺めた写真である。注目してもらいたいのは、教会の壁に接したように写っている背の高い建物

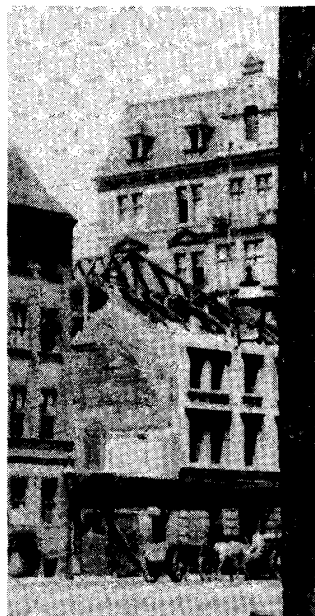


図9 マリエン教会向かいの状況(図8部分拡大)

と背の低い建物である。高いほうは、位置的に僧房街九六番地の建物、低いほう

は、その向かいにあたる同十番地の建物とみられるが、なんと後者は屋根が破壊されている(図9)。また、その左隣は、建設用の柵が設けられ、更地になった様子が伺える。⁽³⁶⁾ここから読み取れることは、鷗外が住

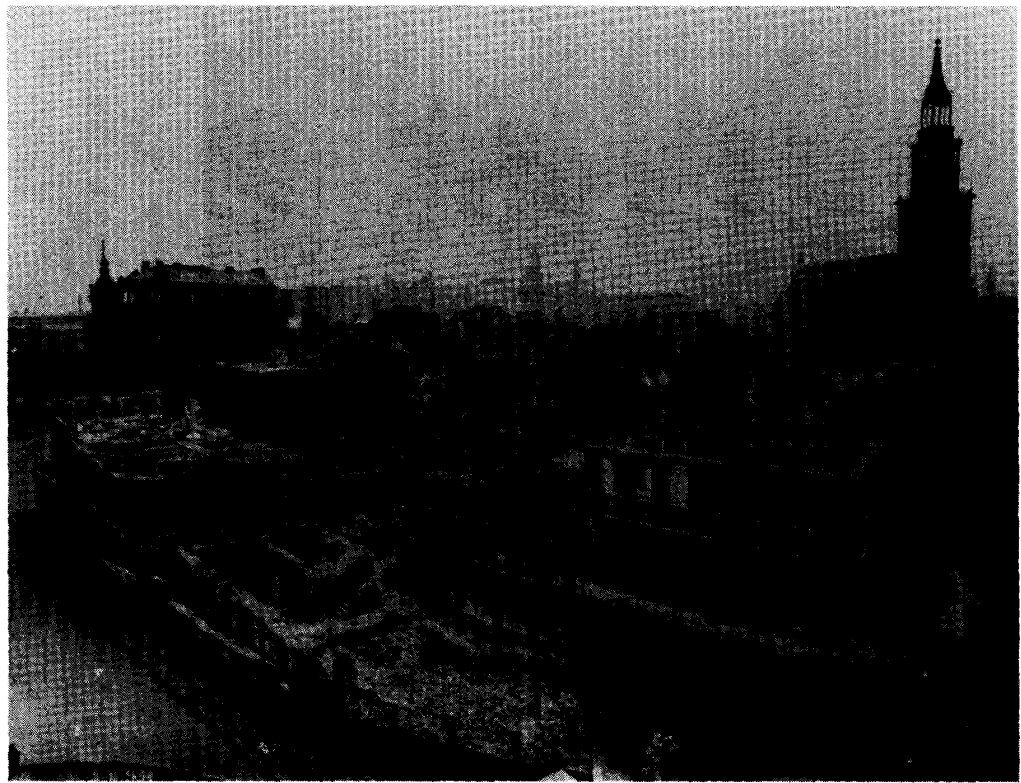


図10 ローゼン街東面の解体現場 (刻印 1894年)

んだ僧房街の区画の再開発終了後、ただちに連続的にその対面にある区画が再開発の魔の手にかかっているということである。図10は、一八九四年の刻印があるもので、僧房街とローゼン街に挟まれた区画全体が破壊されている状況を写したものである。⁽³⁷⁾

おそらく、鷗外は、みずからの住んだ場所がもとは更地だった状態を見ることはなかったと思われる。⁽³⁸⁾しかし、マリエン教会周辺が不断に破壊・建設の嵐に巻き込まれている現状は、いながらにして目撃していたはずであり、そこに「詩情を感じる」以上のなにかをつかんでいたことであろう。

前田愛は、『舞姫』にかんする議論で、そこで登場する『クロステル巷』の描写は、この「日記の」『悪漢淫婦の巢窟』というイメージにあわせて、意識的に再構成されたものではないだろうか⁽³⁹⁾としている。このような評価の背後には、「クロステル街そのものは、古ベルリン地区では明るく開けた大通りのひとつだった」という、それ自体は一面で正しい認識が控えている。鷗外が居住した時点ですでに往時の「悪漢淫婦の巢窟」が消失しているのも、真実といつてよい。だから、『舞姫』に描かれた「狭く薄暗き巷」の実景は、むしろクロステル街周辺の裏通りにのこされていた⁽⁴⁰⁾という予想も筋になっっている。しかしながら、こうしたモデルを、パロヒアル街(Parochialstrasse)、クレーゲル沿い(Am Krögel)にまで無理に求める必要はない。前田も正当に指摘しているように、鷗外が日常的に対面していた僧房街とローゼン街で挟まれた区域は、まさしく古さを忍ばせるベルリンだったのである。

鷗外は、新旧が交代する瞬間に僧房街に生活した。こうした僧房街をめぐる再開発状況の生々しさに想像力が働きはじめると、鷗外が住んだ第二住居周辺について、一面的にその古さを強調してみたり、あるいは近代化の完了した世界として平板に描いてみたりすることに抵抗を感じずようになる。このため、鷗外の住んだ古ベルリンと近代的なウンテル・デン・リンデンとの対比だけで『舞姫』の全体的構図を整理してみせることも、あまりに図式的だと思えてくる。⁽⁴⁰⁾ よしんば、鷗外のなかに近代性と前近代性との葛藤のモチーフがあるとしても、それは、まさに鷗外の眼前の生活現場に広がっていた世界だったとすべきだろう。新旧の対立は、ウンテル・デン・リンデンと古ベルリンとの間だけにあったのではなく、僧房街の道筋を隔てて東西の間にもあったのである。この場合、もちろん鷗外は、新築のモダンな建物に居住する者として、近代性の模範的な具現者たる位置に座らざるをえない。これにたいして、日常的に直面していた——おそらくエリスの住居モデルとなったであろう——区画は、かかる近代性によって有無も言わず死刑を宣告され滅び行く古いベルリンだった、ということである。

三 「古寺」への自然な道行き

『舞姫』の主人公である太田豊太郎の下宿は、「モンビシユウ街」にあると設定されているが、これは、当時のモンビジュー広場(Monbijou-platz)がモデルにされていると断じてよい。⁽⁴¹⁾ この広場は、鷗外の第三の下宿がある大首座街十番地の目と鼻の先であるから、鷗外としては第三

の下宿を念頭におきながら太田の下宿の想を練ったと考えられよう。

ところで、太田がエリスに初めて逢う機縁となる道行きを、『舞姫』では、「余は獣苑を漫步して、ウンテル、デン、リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街の僑居に帰らんと、クロステル巷の古寺の前に来ぬ⁽⁴²⁾」と記している。この経路に坎んしては、かなり以前から疑問が出されてきた。もちろん、太田の下宿を後年になってできあがる実在のモンビジュー街にあるものと誤想しての疑問はいまや論外であろうが、モンビジュー広場、にそのモデルを求めても、やや不自然の趣があることは否めない、といわれるであろう。

ウンテル・デン・リンデンを東端まで歩くとして、そこからモンビジュー広場に向かう最短コースは、ルストガルテン(Lustgarten)を抜け、フリードリヒ橋(Friedrichsbrücke)を渡り、ブルク街(Burgstrasse)を道なりに進み、ベルゼ駅脇を通って、小首座街(Kleiner Präsidentenstrasse)に至る経路である。しかし、それでは、『舞姫』の表現に合致する古寺にたどり着かない。プロイセン王家の菩提寺であるベルリン・ドーム(Berliner Dom)がそれだと強弁するならば別だが、これはさすがに「クロステル巷」に存在するものではない。もともと、フリードリヒ橋を渡った後、蹀を転じてさらにクロステル巷に向かったとすることもできるかもしれない。しかし、これでは、あたかも忘れ物を思い出したかのように、見知らぬエリスを探すため目的意識的にそちらに向かったかのような奇妙な雰囲気醸し出す。

このため、ルストガルテンと王宮(Königliches Schloß)の間をすり抜

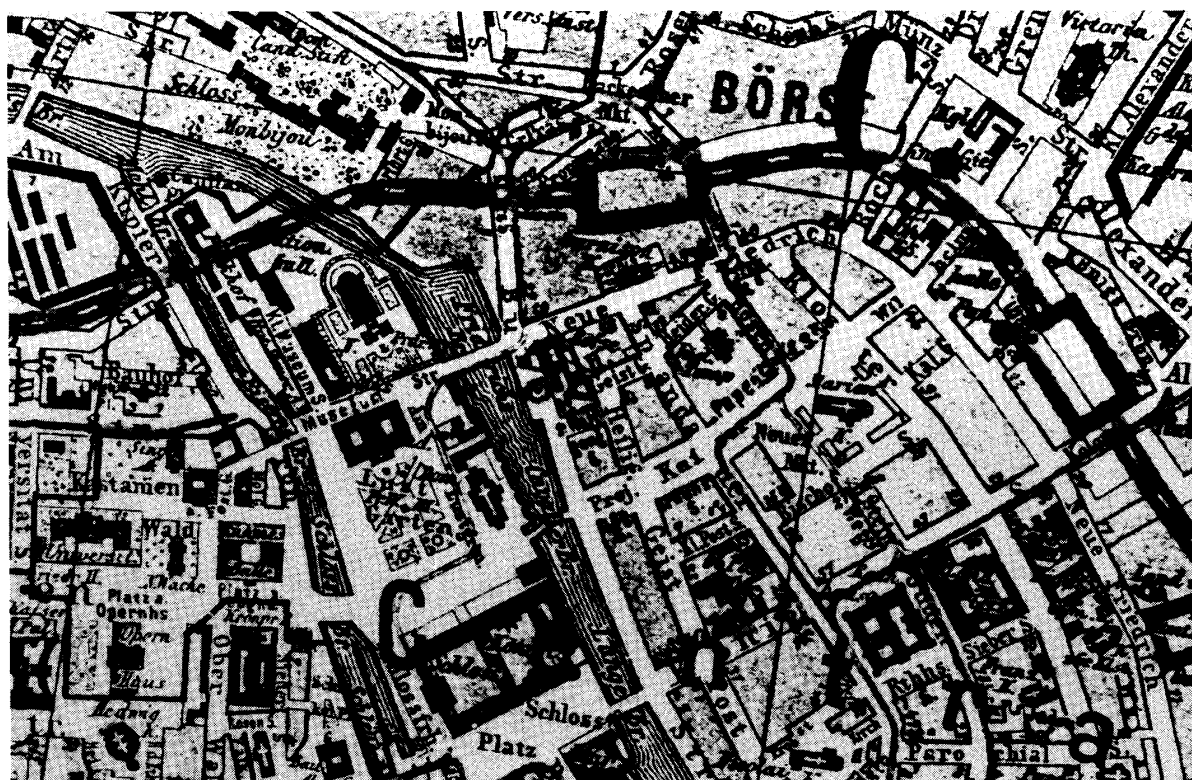


図11 Plan von Berlin mit Nächster Umgebung, 1887. (部分)

けて直進し、カイザー・ヴィルヘルム街に至るとするのが、常識的な理解となるかもしれない。そうすれば、道なりにマリエン教会にたどり着ける。小堀は、こうした直進を前提として自己の議論を組み立てている。⁽⁴³⁾

しかしながら、鷗外がベルリンに住んだ当時は、こうした直進がまったく不可能であった。なぜなら、カイザー・ヴィルヘルム街に至るに不可欠なカイザー・ヴィルヘルム橋(Kaiser Wilhelm-Brücke)がまだできていなかったからだ。

一八八七年に刊行された地図(図11)⁽⁴⁴⁾を見ると、ルストガルテンからシュプレー(Spre)川に架かっている橋は、歩行者用に作られたカヴァリエ橋(Cavalier-Brücke)である。この橋は、前節で指摘したカイザー・ヴィルヘルム街の開発に伴い架け替えられるため、一八八六年に取り壊された。そして、新営されたのがカイザー・ヴィルヘルム橋である。一八八七年に撮影された図12⁽⁴⁵⁾は、その建設の様相である。同様の写真の解説では、工事期間が一八八六年から八九年であったとしている。⁽⁴⁶⁾したがって、鷗外はいかようにしてもこの橋を渡ることができなかったのである。⁽⁴⁷⁾

このため、ルストガルテンからシュプレー川を渡るとすれば、さらに南に架ったランゲ橋(Lange-Brücke)を利用するしかない。この経路は、下宿への道としては遠回りになるわけだから、不合理なものと評価することもできる。しかし、これは、フリードリヒ橋を渡って蹊を転じるほどには不合理ではあるまい。ランゲ橋からキヨオニヒ街に出れば、そこ

はまさしくマリエン教会の後背地であり、さらに教会を右手に眺めて大首座街方面に進むルートが自然に成り立ってくる。

フリードリヒ橋を利用するにせよ、ランゲ橋にするにせよ、クロステル巷の古寺に至るには寄り道が必至であるとするなら、常識的にはどちらの寄り道となるか、という判断が必要となる。このさい、次のことを改めて想起すべきである。カイザー・ヴィルヘルム街の開発は、キヨオニヒ街の混雑緩和のために行なわれたということだ。すなわち、キヨオニヒ街は、それ自体繁華な表通りであって、ぶらつくに格好の場所だったのである。

もともと、ひと——あるいは辻馬車(Droschke)——はいかようにでも動きうる。この欠を補って交通のおもな流れを推定するには、路線のしっかりした交通機関がどういう経路をとっていたかをみるのが参考になるだろう。鷗外が在住した当時は、まだランゲ橋を鉄道馬車が通っていないから、乗合馬車(Omnibus)がどのような経路をとったか、ということになる。鷗外所持のベルリン案内書では、乗合馬車として十七路線記され、そのなかにはアレキサンダー広場からモアビット(Moabit)に至る路線もあるが、残念ながら詳細な経路が記されていない。⁽⁴⁹⁾ 後年の一八九六年の旅行案内書では、この路線がキヨオニヒ街、王宮広場(Schloßplatz)、ウンテル・デン・リンデンを通ることになっている。⁽⁵⁰⁾ 二つの路線が同一である確証は得られないが、ウンテル・デン・リンデンもキヨオニヒ街も人びとの生活にとって重要な位置を占めたことを考えると、かなりの蓋然性で鷗外の在住当時も同様の路線があったと思われる。

れる。「鷗外の当時は、ただ道なりに歩くと、自然と旧王宮を迂回し、ケーニヒ通りに続くようになっていたのではないか」という山下萬里の指摘は、慧眼というべきである。

こうしてみると、鷗外が「古寺」への道行きで念頭においた経路は、作品論的に破綻せざるをえないフリードリヒ橋のルートではなく、ひとの自然な流れがあるランゲ橋のルートであったと断じてよいであろう。鷗外は、「上野から神田の下宿へ帰るのに築地で人に逢ったみたいの方角

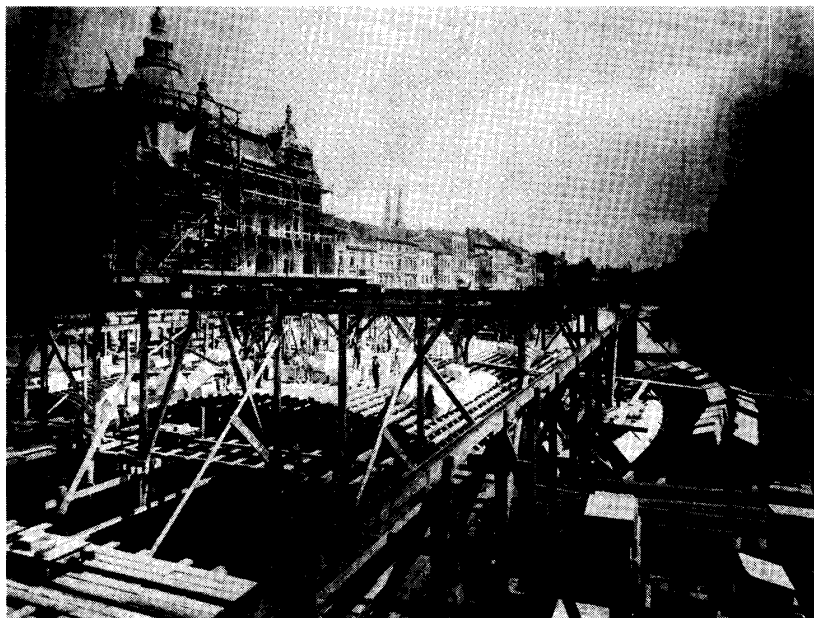


図12 カイザー・ヴィルヘルム橋の建設 (1887年)

違い」なプロットを作成したわけではなく、ごくごく自然なひとの流れを念頭において『舞姫』を書いたということである。問題を生み出したのは、こうした流れを地理的につかむことのできなかつ

た解釈者の側の憶断にすぎない。

四 「古寺」はどこか？

前節では、理由抜きに『舞姫』で描かれた「古寺」がマリエン教会であるとして議論したが、おそらく異論もあるに違いない。小堀、前田はクロスター教会(Kloster Kirche)説をとり、最近では山下がユダヤ会堂(Juden Tempel)説を唱えている。

小堀は、そもそも比較対象からマリエン教会を除外して、クロスター教会とパロヒアル教会(Parochial Kirche)の二つだけの比較を行ない、クロスター教会のほうが「凹字の形」に引っ込んでいると主張する。⁽⁵³⁾ 推測するに、マリエン教会は僧房街に面していないゆえ考慮外なのである。たしかに、マリエン教会をせひとも除かなければならないのであれば、クロスター教会のほうに軍配を上げざるをえないだろう。

前田は、篠原、川上のマリエン教会説を踏まえつつも、⁽⁵⁴⁾ とりわけヘマリエン教会を囲む街並みが凹字の形であるという川上の所説にたいし、「鷗外の表現を自然に受け止めるかぎりでは、家並みが凹字形なのではなく、⁽⁵⁵⁾ 「教会の正面」が凹字形なのだとしている。どうやら、前田は、凹字形ということで「窪んだ矩形」のことを理解しているようだが、川上の指摘するように——そして前田も認めるように——当時その窪地の前に鉄製のフェンスが立ちはだかつていたのだとすれば、鷗外が凹字形を語るいかほどの意味があるというのだろうか。

クロスター教会説の最大の難点は、この教会方面にモンビジューを名

とするものが実在しないので、これを採用すると、鷗外がかなりの程度奇怪なベルリン空間を頭に描いて叙述に臨んだとしかいえなくなるのである。⁽⁵⁶⁾ このため、こうした不整合を無理やり処理しようとするれば、ことさらに『舞姫』の「フィクション性」なるものを強調せざるをえなくなるだろう。⁽⁵⁷⁾ もちろん、『舞姫』がフィクションであることに異議はないが、しかし、それと鷗外がもつ空間認識とは別問題のはずである。

こうした経路上の難点を回避しつつ、依然としてマリエン教会が凹字形に建っていると評価しない立場を堅持するとなると、モンビジュー広場ないし大首座街に近い適当な寺院がないか、という発想になる。たとえば、山下は、これらにほど近いハイデロイター小路(Heiderouter-gasse)に面したユダヤ会堂が鷗外の語る「古寺」ではないかとしている。⁽⁵⁸⁾

山下は、家並みの形成と寺門の位置の点で、こうした主張をする。すなわち、家並みの形成についていえば、「凹字の形」をへすで家並みが出来あがっているところに引っ込んだところが出来た⁽⁵⁹⁾ という意味として解すべきだとし、ユダヤ会堂の場合はそうだが、マリエン教会の場合、後で家並みができたと考えられ、しかも「道路に斜行している」ため、「凹字の形」にならないと断ずる。また、寺門の位置についていえば、エリスに声をかけるという作品のプロットに沿って考えると、それが道端になければならないとし、マリエン教会の場合、教会の入口はあっても寺門なるものはない、という。

しかしながら、これらの理由はあまり説得的ではない。

鷗外が家並みの歴史的前後関係で「凹字の形」を語ったとはまったく思われないが、百歩譲ってそうであったとしても、むしろ、ユダヤ会堂の方が後に家に囲まれる経過をたどっている。おそらく、山下が証拠とする図版の年代（一七九五年）では、会堂の前に建物はなかったであろう。しかしながら、鷗外がベルリンにいた十九世紀末には、この会堂は建物で完全に囲繞されてしまっている（図2）。これにたいし、マリエン教会の場合、建物によって四角く囲まれていた状態から——カイザー・ヴィルヘルム街の開発に伴い——前面の建物が除去され、いわば開口した格好となっている。マリエン教会は、後に家並みができたところか、後に家並みが破壊されたのである。

もともと、こうした歴史的経緯は議論の核心ではなく、あくまでマリエン教会が「道路に斜行してたっている」ことに力点がおかれるのである。うが、「凹字の形」ということで真直ぐに道路に面しているとまで解釈することができるのか、いささか自信のないところである。

また、建物の入口とは別の寺門についてだが、鷗外の在住当時、ユダヤ会堂の前に建物があったのだから、道路に面した門があったとしても、これでは会堂そのものがさらに視野から遠ざけられることになる。このような配置状況で「心の恍惚となりて暫し佇みしこと幾度なるを知らず⁽⁵⁹⁾」ということになるであろうか。この点、マリエン教会であれば、カイザー・ヴィルヘルム街に面して教会の入口が明確にとらえられる。鷗外のいう「寺門」は、この教会の入口と解すほかはない。

とはいえ、かくもマリエン教会に確信がもたれないのは、「直接クロ

スター通りに面しているわけではない、という難点がある⁽⁶⁰⁾」からであろう。しかし、図6でみられるように、マリエン教会が、クロステル街からその側面を眺めることのできる教会として、「クロステル巷」にあるものと認知されるだけの充分な理由はあるのである。

五 第三住居へ「一緒に」転居

冒頭でも述べたように、鷗外は、一八八八年四月に、ハアケ市場に面する第三の下宿に移っている。その理由が明確に説明されないため、この転居には詮索がつきまとい、たとえば篠原は、交通の利便性では第二住居と第三住居に遜色がないにもかかわらずあえて移動したのは、鷗外が第二住居に居づらくなったからだ、と推測している⁽⁶¹⁾。

交通の利便性にかんしては、たしかに、鷗外の第二の下宿とハアケ市場との間はたかだか五分程度の道のりでしかないから、第三の下宿に移れば飛躍的に便利になる、ということはないだろう。ただ、すでに示したようにカイザー・ヴィルヘルム街が工事中で、また、一八八八年には「市庁舎からモルケン市場にかけてシュパンダウアー街の単線区間が複線区間に改造された⁽⁶²⁾」とも報告されており、第二の下宿に南からアプローチする交通が八八年にかけて一時的に遮断ないしはきわめて不便になった可能性があることは、考えておかなければならない。加えて、鷗外には聯隊勤務の命が下り、僧房街の南にあった衛生部とも縁が切れる状態となっている。鷗外の生活がベルリンの北にシフトしたとき、鉄道馬車の始発があるハアケ市場に魅力を感じることもないとはいえないだ

ろう。こうした背景があるなかでなんらかのきっかけが与えられると、転居する必然性が生まれるかもしれない。⁽⁶³⁾

ところで、加速度的な変動のなかにある都市の状況に呼応してかどうかは知らぬが、鷗外が転居した大首座街十番地の居住者の動態にもめまぐるしいものがある。『ベルリン住所録』によれば、その建物は、ヘルメス (Hermes, E.) という年金生活者 (ないし商人) の所有になるもので、記録上の実態ではほぼ十三家族が入居しているが、一八八七年版と八八年版とは四家族、八八年版と八九年版とも四家族の入れ替わりが認められる。⁽⁶⁴⁾ また、『フォス新聞』では、一八八八年一月から二月にかけて、この建物の二階三部屋、四階七部屋、五階五部屋の賃貸物件が広告されている。⁽⁶⁵⁾

鷗外に部屋を又貸したルツシュ夫人は、『ベルリン住所録』の一八八九年版で初めてこの場所に現れる。記事は前年の実態を反映するからルツシュ夫人は一八八八年にここに転居したことになる。また、『独逸日記』によれば、鷗外は「第三層屋」すなわち日本という四階に住んだわけだから、ルツシュ夫人の住居も当然四階であろう。つまり、夫人は、新聞広告をもとに、ここに入居したのである。重要なことは、広告によると四階は四月一日に賃貸するとされており (図13)⁽⁶⁶⁾、これはもちろんルツシュ夫人の入居日でもあるが、鷗外が転居した日でもあるということである。常識的なイメージでは、すでにある物件を占有しているひとがいて、そのひとが誰かを下宿させるというものだろう。しかし、ルツシュ夫人の場合は違う。入居する以前に、夫人は鷗外とともに転居する

Vermietungen.
Luftauer Str. 4. herrsch. Haus mit Portier,
 Wohn., K. u. 2 Tr.,
 v. 6 Zimm., Badz. u. a. 1. April zu verm.
 Stadtbahnhof Börje.
 Große Präsidentenstr. 10. (Ecke Hofescher
 Markt, herrsch. III. Etage, 7 Z., davon 4 zweif.
 Vorderz., zum 1. April zu verm. Näh. b. Portier.

図13 『フォス新聞』第四付録 1888年1月4日

約束を交わしていたということである。

『ベルリン住所録』を詳細にみると、ルツシュ夫人が寡婦であること、旧姓をセンフトレーベン (Senftleben) ということ、また肌着製造工場 (Wäscheabrik) を営んでいることがわかる。夫人は、大首座街に転居する以前、ノイエ・フリードリヒ街四五番地の三階に住んでいた。⁽⁶⁷⁾ これは、鷗外の第二の下宿と至近の距離にある。もつとも、分かるのはここまでで、鷗外がルツシュ夫

人どのように接触したのか、目下のところ追及するすべはない。ただ、夫人が肌着製造業という衣料にかかわる仕事に従事していることには、特別の意味があるかもしれない。

『独逸日記』によれば、鷗外は、一八八七年十月三十日より、ベック (Beck, Bernhart) を教師としてフランス語を学び始める。⁽⁶⁸⁾ ベックは、シュミット街 (Schmidtstrasse) 八番地に住むとされることから、『ベルリン住所録』でそれを調べると、Beck J. が既製子供服製造業者 (Konfekt. f. Knaben=Garderobe) であると記されている。⁽⁶⁹⁾ 鷗外がじかに接した Bernhart Beck と J. Beck との関係がどのようなものであるか、これだけの資料では判然としないが、なんらかの形でおたがいが親族関係にあったと推測することは、常識にかなう見方だと思われる。

ここでひとつの関心は、鷗外がこのベックとどのように知り合ったの

か、ということであろう。そこには、案外に、石黒忠憲の現地妻蒼山が



図14 ハアケ市場から大首座街10番地を左手に望む（1890年頃）

フランス人であることとかかわりがあるかもしれない。すなわち、鷗外は、毎週日曜日午前にベックからフランス語を学ぶことになるのだが、蒼山がこのことに関与している可能性があるのである。『石黒日記』一八八八年二月二六日（日曜日）の項に「蒼山氏ヲ訪フ談又森ノ事二及フ同氏曰同人勤勉毎週一回接話スト」⁽⁷⁰⁾とあり、「勤勉」「接話」というのをフランス語のレッスンの言及と仮定すると、蒼山自身が鷗外の会話相手となったか、あるいはこれにベックも加わっていたか、それとも蒼山が鷗外とベックのレッスンを間接的に伝えたか、といういくつかの推測が成り立ってくる。もちろん、これらはあくまで仮定にもとづく推測にすぎないし、蒼山とベックとのかかわりを打ち消す推測も充分可能なわけだから、鷗外がいかにしてベックと知り合いとなったのか、こうした材料では確たることはなにも言いえない、とするほかはない。⁽⁷²⁾

しかし、いずれにせよ、かなりの蓋然性をもっていえることは、フランス語教師ベックを介して、鷗外がベルリンの衣料関係者と深い交流関係にあったということである。そして、ルツシュ夫人も、その衣料関係者の一人であった、ということだ。もちろん、鷗外がどのようにしてルツシュ夫人と知り合ったのか、その認知経路が確定できぬかぎり、有意味なことをなにも語ることはできない。しかしながら、第三住居への鷗外の転居が、ルツシュ夫人とともに同日に行われているという事実をふまえると、鷗外がルツシュ夫人（あるいはその親族）とまったく無意味な関係にあったとすることもできないと思われる。

六 鷗外第三住居の残存可能性

ところで、鷗外の第三住居はどのような姿をしていたのだろうか。これにかんしては、すでに金山重秀が一つの写真を提示している。⁽⁷³⁾ しながら、それは、左手が小首座街、右手がノイエ・プロムナード (Neue Promenade) の角地にあたる、哲学者フィヒテの家として有名な写真であり、鷗外の住んだ大首座街十番地とは対極の位置のものでしかない。⁽⁷⁴⁾ しかも、その写真にある建物は、市内鉄道開通 (一八八二年) 以後には存在しないものであり、鷗外は残念ながらその風景を見ることすらできなかった。

幸いなことに、一八九〇年にハアケ市場から大首座街十番地を撮った写真 (図14)⁽⁷⁵⁾ がある。手前にひとが立ち、乗合馬車が見える広場がハアケ市場であり、左側の建物がハアケ市場四番地、それに連続して張り出し窓 (Erker Fenster) がある角地が大首座街十番地である。中央の霞ん

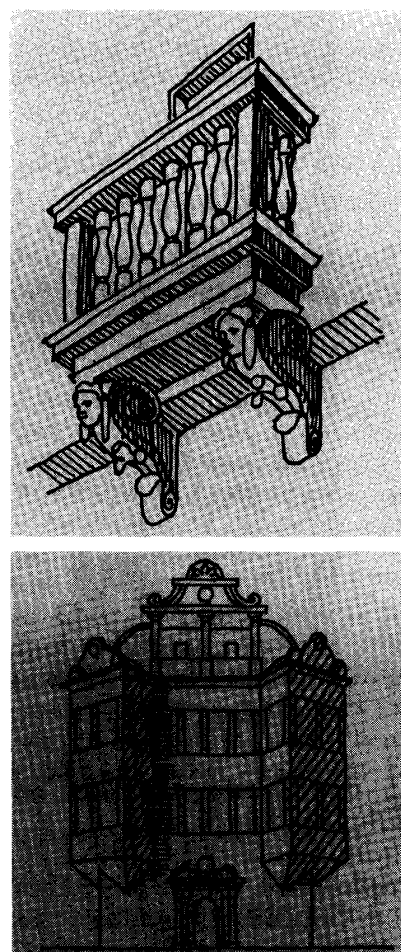


図15 Balkon (上) と Erker Fenster (下)



図16 第2次大戦で破壊された大首座街10番地 (1950年頃)

だ部分は、大首座街とオラニエンブルガー街の合流地点となる。

鷗外の『独逸日記』のなかで第三住居には「出窓Balkon」があると記されているので、出窓とはこの張り出し窓ではないか、鷗外は大達に面した眺めのよい部屋でベルリンの最後を暮らしたのではないか、と思われる

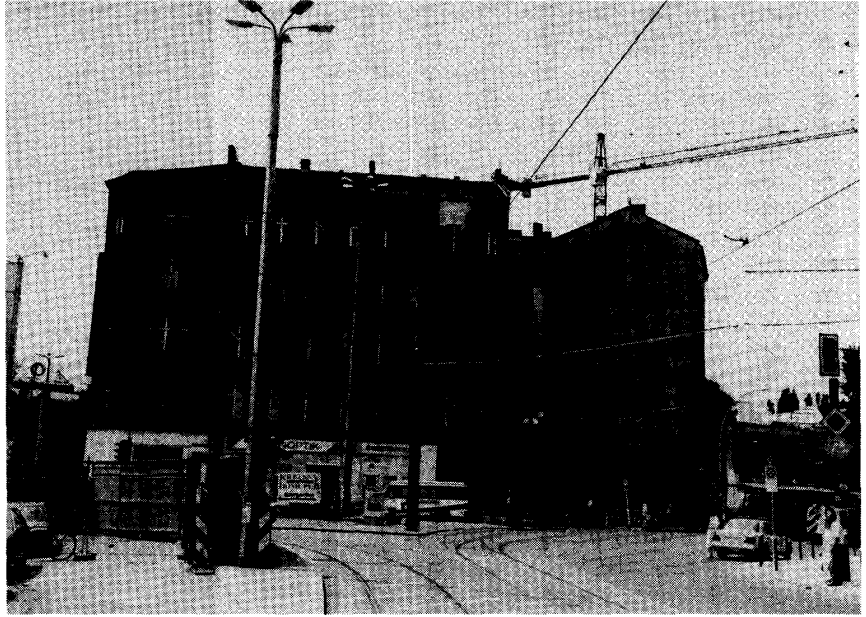


図17 ハケア市場（1997年、筆者撮影）

かもしれない。しかし、これは早計にすぎず。BalkonとErker Fenster

の間には混同の余地がない(図15)。

写真では見えにくい、大首座街にじかに面した部分にErker Fensterはあるが、Balkonは確認できない。そ

していると思われる。もし「大鉄盤を置く」のがErker Fensterの内側の室内のことであれば、その機能が理解できない。また「蔦蘿が之に纏う」の「之」とは外の出窓のことであろうが、写真から分かるように、Erker Fensterでは、室外に鉄板を置いたり、蔦が絡まるような状況になう。

しかも、もし鷗外の住居が広場や街路に面していたのであれば、日記のなかでその眺めのよさ、その賑やかさが伝わるなにかが記されてよいであろう。しかし、それがないのである。

これらの点から、「出窓」ということとErker Fensterのことを指しているのではないとみられる。鷗外は、BalkonとErker Fensterと区別して正確に理解しており、Balkonを「出窓」と訳しただけのことである。

だとすれば、伝えられた写真にはBalkonがないのだから、それが大首座街十番地を写しているという解説が間違っているのだろうか。いや、おそらくそうではない。Balkonはちゃんと存在するのである。

この点は、現存する大首座街十番地の建物を見ると納得がいくのだが、そもそも現存する建物が鷗外滞在当時の建物を伝えているかどうかはつきりしなければならない。この問題につき正確を期するには、物件の建築確認等の記録にあたる必要もあるであろうが、目下のところそれはわれわれの能力を超えている。そこで、簡単に外面に頼って議論することを許していただきたい。

大首座街十番地の建物は、第二次世界大戦の空襲等によって半壊した。その模様については、一九五〇年の写真が伝えている(図16)。(76) ここで

れでも、Erker Fensterが鷗外のいう「出窓Balkon」だとあくまでも主張することができるだろうか(もちろん、この場合には、鷗外の誤解もいわなければならない)。しかし、これは、『独逸日記』の記述からしても根拠が薄い。

『独逸日記』では「出窓Balkonの下に大鉄盤を置き、中に花卉を植ゑ、蔦蘿之に纏ふ」(77)という叙述があるが、これは室外に露出した情景を描写

注目してもらいたいのが、破壊を免れたハアケ市場四番地側の窓および破風(pediment)の形状である。これを図14と比較すると、これらが基本的に同一であることが確認できるだろう。そして、この破壊された部分はそのまま除去されて、今日に至っている。図17は、われわれの撮影したもののだが、破壊された箇所が平らに塗り込められている。この壁のある側が大首座街十番地である。もともと、現状では破風が存在していない。したがって、この建物は、いずれかの時期——一九五七年にはまだ破風が存在しているからそれ以降⁽⁷⁹⁾——にかなりの補修が施されたともてよい。⁽⁸⁰⁾ いずれにせよ、鷗外滞在当时の建物は、半壊の憂き目に遭ったものの、一部は今日に伝えられていると考えられる。

その残された大首座街十番地を実地に検分し、中庭から眺めるとき

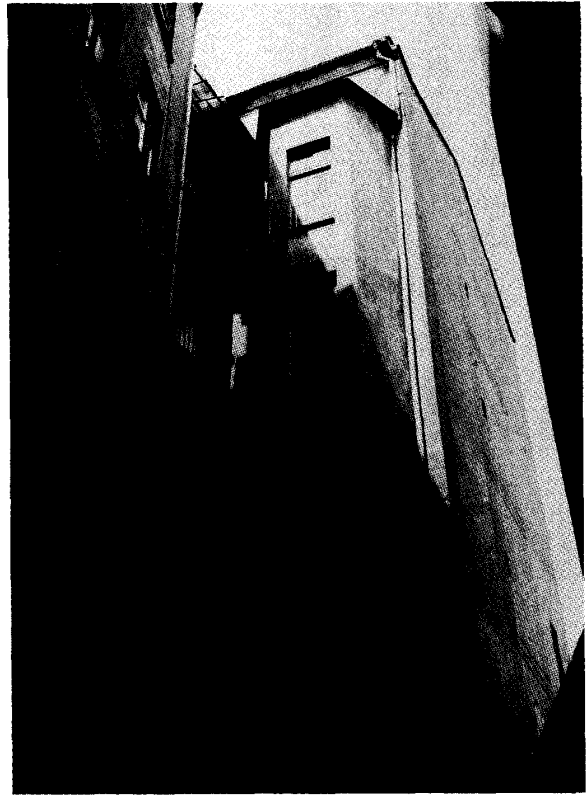


図18 大首座街10番地中庭よりBalkonを望む (1997年、筆者撮影)

んとBalkonが存在している(図18)。また幸いにも、このBalkonを部屋の内側から見る機会が得られた。図19は、四階のうちBalkonがつけられた室内を写したものである。左手の窓の先にBalkonがある。このBalkonのある窓は、この部屋にとって唯一の明かり取りとなるものである。図20は、Balkonを接写したものである。Balkonが鉄を素材にしているのかどうかは確かめる暇がなかった。もちろん、いずれかの時期に補修されている可能性をなきとしない。ただ、Balkonに通ずる扉がその左右についている構造上、Balkonが補修時に新設されたという可能性はきわめて低いと思われる。



図19 大首座街10番地第三層屋Balkonに面した室内 (1997年、筆者撮影)

充分とはいえない。しかしながら、少なくとも次のことだけはいいうると思う。Balkonは、表通りではなく中庭に面した部屋に付属していたものであること、したがって、鷗外は、街路に面した明るい部屋ではなく、南に面しているとはいえやや閉塞的な部屋に住まったということ、これである。



図20 第3層屋扉からBalkonを眺む（1997年、筆者撮影）

もつとも、

大首座街十番

地の消失部分

に、この部屋

と対になる中

庭に面した

Balkon つきの

部屋があつた

と考えられな

くもないから、

現存する部屋

が鷗外の居住

した部屋であ

ると特定する

根拠は、これ

だけではまだ

おわりに

ベルリンに限らない問題だが、都市をステイックにとらえると、足元がすぐわれる。都市は不断に流動化しているのである。もつとも、そうした一般論を超えて、鷗外が生活したベルリンはプロイセン形成期の近代化過程でとくに変動が激しかったともいえるだろう。いずれにせよ、そうした流動化の真相に迫る資料探索が必要だし、また資料批判が必要であることは、当然すぎて、改めて言うべきことではないのかもしれない。しかし、現状ではやはり言うべきことなのである。

おそらく、こうした都市の流動相が見えてくるとき、鷗外のひとと作品を解釈しなおす必要に迫られてくるかもしれない。少なくとも鷗外自身は、目前のベルリンが、いや西欧自身が、「普請中」のただなかにあることを知っている。解釈者の側がそれを知らないでいては、鷗外の真諦に迫りえない、というのは、言葉に過ぎるだろうか。

本稿では、ささやかながら、鷗外の滞在したベルリンの流動相の一端を提示したのみであり、今後また別のアспектからも、あるいは別の都市についても、研究がなされるべきものだと考える。

なお、本稿をなすにあたって、跡見学園女子大学文学部の山崎一穎先生から鷗外研究をめぐる貴重な資料のご提供を賜り、また懇切なご助言をいただいた。また、同じく嶋田英誠先生には、資料の写真撮影についてご指導をいただいた。ここに感謝の意を記しておきたい。

注

- (1) 森鷗外「独逸日記」、『森鷗外全集』十三、ちくま文庫、一九九七年（以下「独逸日記」）、一六一、一六八、二二八頁参照。森鷗外「自紀材料」、前掲書四五〇頁参照。なお、ベルリンの地名、人名等にかんし「舞姫」、『独逸日記』において鷗外による音写、翻訳がある場合には、極力それを用いる。
- (2) 「独逸日記」、一六八頁参照。
- (3) 小堀桂一郎『若き日の森鷗外』、東京大学出版会、一九六九年、五二八頁参照。
- (4) 本稿は、筆者がヘーゲルの論敵H・E・G・パウルスの政治思想研究のため一九九七年度跡見学園留学助成費によって一九九六年九月から九七年八月までベルリン・フンボルト大学に留学したさいに副次的に調査・研究した成果の一部である。本稿の基本的な内容は、すでに文京区立鷗外記念本郷図書館第二五六回文学講座（一九九八年二月十四日）で「普請中」のベルリン——一八八七～八年の鷗外住居考」として口頭発表している。ベルリンでは、植木哲（関西大学法学部）とともに鷗外について共同研究をおこない、筆者はおもにベルリンにおける地図、住所録、写真、旅行案内等の地誌的資料を発掘し、植木はおもに不動産登記簿等からエリス関連の資料を発掘した。共同研究では、日常的に調査・研究の到達点を討議し、資料を交換し、各自の原稿を相互に——直接ないし電子メールで——回覧して、事実認識を補正しあった。本稿は、こうした植木との共同研究の賜物である。ここに、共同研究者植木にたいし感謝しておきたい。なお、本稿の記述のうち植木の教示によって筆者の眼が開かれた点のある場合には、煩を厭わず指摘しておいた。
- (5) 篠原正瑛「鷗外とベルリン——『舞姫』『キタ・セクスアリス』『妄想』の跡を訪ねて——」、『鷗外』第五号、一九六九年、十二頁参照。
- (6) Vgl. *Führer durch das medicinische Berlin, nach authentische Quellen bearbeitet*, Berlin 1886 (abgk. FB.), S. 118, 184. この案内書は鷗外が所持したものの。小堀、前掲書、四九五頁参照。なお、コッホの研究所が第一の下宿近傍のルイゼ街 (Luisenstrasse) にあったとする説は、篠原正瑛「鷗外とベルリン (三)」、『鷗外』第九号、一九七一年、二九頁参照。
- (7) Vgl. *Berliner Adreßbuch für das Jahr 1887, unter Benutzung amtlicher Quellen redigiert von A. Ludwig* (abgek. BA.), Berlin 1887, III. T., S. 517. 小堀、前掲書、五〇八頁参照。このカフェが、「舞姫」における「キヨオニヒ街の間口せまく奥行きのみいと長き休息所」のモデルである可能性がある。森鷗外「舞姫」、『森鷗外全集』一、ちくま文庫、一九九五年（以下「舞姫」）、二二頁参照。なお、大陸骨喜店を「ウンテル・デン・リンデン」の近くにあった高級ホテル Continentalhof の喫茶室」とするのは、「独逸日記」、一六三頁参照。なお、BA の所在は植木から教示を受け、筆者みずからその渉猟をおこなった。
- (8) Vgl. A. Gottwaldt, *Das Berliner U- und S-Bahnnetz, Eine Geschichte in Streckenplanen*, Berlin 1995², S. 7.
- (9) 川上俊之は「一八八九年版のペデカーを参照し、この路線を指摘している。川上俊之「『舞姫』の謎」、『鷗外』第三十号、一九八二年、七五頁参照。
- (10) Alexanderplatz — Münzstraße — Weinmeisterstraße — Rosentalerstraße を結ぶ路線は、一八八八年から八九年にかけて開通したものである。Vgl. E. Buchmann, *Die Entwicklung der Großen Berliner Straßenbahn und ihre Bedeutung für*

die Verkehrsentwicklung Berlins, Berlin 1910, S. 12. 本文指摘の伝一八八八年ベ
デカーの地図にはこの路線が記述されている。

- (11) Vgl. *FB*, S. 19.
- (12) Vgl. a. a. O. Vgl. *Agenda*, Rudolph Hertzog, Berlin 1886, S. 189.
- (13) 「独逸日記」一六八頁参照。
- (14) Neuhaus, „Die Kaiser Wilhelm-Strasse in Berlin“, in: *Zeitschrift für Bauesen*,
hrsg. im Ministerium der öffentlichen Arbeiten, Jahrgang 88, Berlin 1888
(abgek. *KWB*), S. 430. Vgl. 1856 *Berlin 1896. Photographien von F. Albert*
Schwartz, Mit Bilderlauteurungen von H. W. Klünner und einer Einführung von L.
Dempis, Berlin 1991, S. 31. クリムナーは「僧房街の写真を評して「犯罪者
と売春婦の隠れ家」だったと記している
- (15) Vgl. „Graphische Darstellung der Dichtigkeit der Bevölkerung Berlin in den
einzelnen Stadtbezirken nach Massgabe der Volkszählung vom 1. December
1875“, in: *Von Marktplatz zur Metropole. Berlin in historischen Stadtplänen aus
über 300 Jahren*, kommentiert von M. S. Cullen und U. Kieling, Berlin 1995.
- (16) 「鷗外の第二の下宿の向かって左隣と思われる所にクライナー・ユーデン
ホーフが存在していた」。川上俊之「『舞姫』をめぐる補註的考証——『エル
ンスト・プライプトロイ』のこと等——」、『鷗外』第十八号、一九七六年、
十七頁。しかし「川上は、後に説を変える。注一〇参照。
- (17) 山下萬里「森鷗外『舞姫』の舞台——ベルリンのユダヤ人(二)——」、『拓
殖大学論集 人文・自然科学』第一卷一号、一九九三年、五五頁参照。
- (18) *Situations-Plan, Haupt- und Residenz-Stadt Berlin und Umgegend*, bearbeitet
von W. Liebenow, Berlin 1888 (abgek. *SP*). この地図の縮尺は一对六二五〇
の詳細なもので、ベルリンとその周辺を全体十四葉で覆う。掲載図は、原図
を約七三パーセントに縮少し、二葉を貼り合わせている。なお、筆者が鷗外
の第二の下宿に関して深く追及する機縁となったのは、その新築物件の不動
産登記簿——これは植木が取得している——の記述が、この地図の記述とか
なり異なることに気がついたためである。この地図は、一八八八年版だが、
地図の常として、数年前の事実に基づいていたり、あるいは都市計画の内容
を先取りしていたりで、考証抜きにそのまま利用できるものではない。
- (19) 「独逸日記」一六八頁。
- (20) 「鷗外の下宿(クロステル街九七番地)」は、クライネル・ユーデンホーフを
含む周辺地区の再開発により新築されたばかりの宏壮な家。川上俊之「『舞
姫』エリスの原像——小説技法上の序論的考察——」、『鷗外』第二九号、一
九八一年、七頁。こうした重要な指摘は、いまだに鷗外研究者の基本的認識
となっていない。たとえば、中井義幸は次のように言う。「九ヵ月半彼〔林太
郎〕が住んだクロスター街は、古ベルリン地域の裏通りの貧民街である」。中
井義幸『鷗外留学始末』、岩波書店、一九九九年、三二六頁。
- (21) カイザー・ヴィルヘルム街建設株式会社の事業には、『王壁』と『小ユダヤ
人館』の除去が含まれていた。Vgl. Die Bebauung der Kaiser Wilhelm-Strasse
in Berlin. (Schluss)“, in: *Centralblatt der Bauverwaltung*, hrsg. im Ministerium
der öffentlichen Arbeiten, 1885, No. 8 (abgek. *CB*), S. 82. Vgl. *KWB*, S. 431.
- (22) 川上、前掲箇所参照。なお、キクトリア座 (Victoria Theater) が一八九一年
に幕を閉じるのも、この開発計画に従ったことである。ところで、キクト

- リア座が「ウンテル・デン・リンデン」の南約二キロメートル、グナイゼナウ街(Gneisenau-str)とベルリアンス街(Belle-Alliance-str)の交叉するあたりにあった」という説は、『日本近代文学大系』第十一巻、森鷗外集Ⅰ、角川書店、一九七四年、四七頁参照。これと同様に、『ベルリン市南部のヴィクトリア公園の近くにあった小劇場』だとする説は、『舞姫』、十七頁参照。しかしながら、これらで指摘される劇場は、鷗外所持のベルリン案内書では、『Belle-Alliance-Theater, Belle-Alliancestr. 7-10』とされるもの。同案内書では、『明確に』、『Victoria-Theater, Münzstr. 20』とある。Vgl. FB, S. 26.
- (23) „Lageplan, Massstab 1: 10000, Bebauung der Kaiser Wilhelm-Strasse in Berlin“, in: CB, S. 82. 掲載図は、原図を約九〇パーセントに縮小している。
- (24) „Abb. 3. Anordnung der beiden Häuserblöcke zwischen der Kloster- und Neuen Friedrich-Strasse“, in: KWB, S. 443.
- (25) Vgl. CB, S. 83.
- (26) ベルリン・ランデスアルヒーフ所蔵。裏書は『Klosterstr. 1888』だが、これは焼き増し時に刻印された印刷年代にすぎない。この地域の開発の進行に照らせば、撮影年代は一八八五―八六年であろう。一八八五年に新建築条例が公布されて建築制限が厳しくなるとの見通しから、建築認可を駆け込みで申請し、ほとんどの建築確認が八五年の新条例施行以前におりとされる。Vgl. KWB, S. 445. したがって、建築行為そのものは、八五年から八七年までの間に行われたことになる。写真は、『土台すらまだ作られていない状態であるから。八五年から八六年のものともみることができ。』
- (27) ベルリン・ランデスアルヒーフ所蔵。裏書は『Klosterstrasse, Ecke Papenstrasse』で、年代不詳。しかし、工事の様子から、前注の写真とはほぼ同年代と推定できる。
- (28) 『ベルリン住所録』一八八七年版によると、僧房街十一番地が欠番となる。☒ 6の写真では同十一番地の建物が残っている。Vgl. BA, 1887, II, T., S. 196.
- (29) „Bauarbeiten in der Nähe der Marienkirche, Mebbildanstalt, 1888“, in: H. Zettler und H. Mauter, *Berlin in frühen Photographien 1844-1900*, hrsg. von Märkischen Museum Berlin, Berlin 1994, S. 57. これは、マリエン教会の写真が載っているのだなんの気なしに購入した写真集だが、この写真の標題を読み、細部をみつめているうちに、『そこにただならぬ深刻な意味が含まれていることに気づき、しばし蒼靄め呆然としたことを忘れることができない。』この模様の絵は、『容易に参看できる。杉本俊多『ベルリン——都市は進化する』、講談社現代新書、一九九三年、五三頁参照。』
- (30) 「そもそもこの教会堂は、周辺の四角い街区の家並みに囲われ、狭苦しい空き地に建っていたのである。その家並みが取り払われたのは、約百年前の一八八六年のことにすぎない」。杉本、前掲書、五二頁。
- (31) Vgl. BA, 1887, II, T., S. 197.
- (32) Vgl. BA, 1888, II, T., S. 200.
- (33) 川上俊之、前掲箇所以下。なお、道幅は、計画によると、最西端二六メートル、ノイエ・マルクト近辺三三メートル、僧房街近辺二二メートルとされた。Vgl. CB, S. 83.
- (34) ベルリン・ランデスアルヒーフ所蔵。裏書は『Kaiser-Wilhelmstrasse, 1888』。
- (35)

- (36) ベルリン・ランデスアルヒーフには、**図8**左端の建物が破壊された状況の写真もある。
- (37) ベルリン・ランデスアルヒーフ所蔵。裏書きは、*„Rosenstraße östliche Seite, während des Abbruchs. Uebersicht über das ganze Baufeld.“*
- (38) 一八八七年四月以前に鷗外は数回ベルリンを訪れているが、『独逸日記』の記述に依拠するかぎり、唯一、一八八六年二月二二日にブルーメン街 (Blumenstrasse) の葦下戯園 (Residenz Theater) へ赴いたさい建設現場を瞥見したかもしれない。しかし、往復の経路を考えたとき、その現実性はさわめて低いと思われる。「独逸日記」、九六頁参照。
- (39) 前田愛『都市空間の中の文学』、筑摩書房、一九八二年、二二六頁。以下、本段での前田にかんする言及は、この引用箇所を前後する。
- (40) 「豊太郎の生活史は、ウンテル・デン・リンデンの開かれた外的空間から、クロステル街の閉ざされた内的空間へと、その境界をふみこえたときにひとつの転機が訪れる」。前田、前掲書、二二三頁。
- (41) モンビジュー街 (Monbijoustrasse) は、一九〇五年に開通した。Vgl. K. H. Gärtner, et al., *Berliner Straßennamen, Ein Nachschlagewerk für die östlichen Bezirke*, Berlin 1995, S. 279. 当時の地図上も明確である。**図1**、**図11**を見よ。
- 鷗外滞在時におけるモンビジュー街実在説は、篠原「鷗外とベルリン」、十四頁他参照。最近のものでは、嘉部嘉隆他編『森鷗外集 独逸三部作』（改訂版）、和泉書院、一九八七年、七頁、「舞姫」、十五頁参照。モンビジュー街の不在の指摘は、小堀、前掲書、四九三頁、詳しくは、川上『舞姫』をめぐる補註的考証」、十一頁参照。このような問題で鷗外研究が紛糾している事情については、植木から指摘を受けた。
- (42) 「舞姫」、十四頁。
- (43) 「大きな広場をなしている島の中央部をよこぎってケーニヒス・ブリュッケ（現在のリープクネヒト・ブリュッケ）でシュプレーを渡り、直ちに左に折れて川ぞいの道を約五〇〇米ゆけばそこがモンビジュー・プラッツである」。小堀、前掲書、四九四頁。なお、「ケーニヒス・ブリュッケ」は、カイザー・ヴィルヘルム橋の誤りであろう。
- (44) *Plan von Berlin mit Nächster Umgebung*, hrsg. v. J. Straube, Berlin 1887. この地図の縮尺は一对一七七七七。掲載図は、原図を約一六七パーセントに拡大している。
- (45) „Bau der Kaiser-Wilhelm-Brücke, H. Rückwardt, 1887“, in: *Berlin am Wasser, Fotografien 1857-1934*, hrsg. v. J. Hansen und H. Mauter, Berlin 1993, S. 47.
- (46) *Berlin zwischen Residenz und Metropole, Photographien von Hermann Rückwardt 1871-1916*, Mit Texten von M. Neumann und J. Frey, einem Vorwort von R. Altner und Bilderläuterungen von H. Zettler und J. Hansen, hrsg. v. Märkischen Museum Berlin, Berlin 1994, S. 76.
- (47) したがって、「カイザー・ヴィルヘルム通りからシュバンダウ通りに左折、さらにハイデロイト小路を右折し、ローゼン通りを左折してベルゼ駅の東側を抜け、『モンビジュー街』にむかう」という説も成り立たない。山下、前掲論文、五一頁参照。
- (48) 一八九六年版のベデカーにも記載はない。Vgl. *Berlin und Umgebungen, Handbuch für Reisende von K. Baedeker*, 9. Aufl., Leipzig 1896 (abgek. Baedeker).

Vgl. *Straßenbahn Archiv 5, Berlin und Umgebung, Von einem Autorenkollektiv unter Leitung von Dr.-Ing. G. Bauer, Berlin 1987, S. 43.* 以下「一八九六年当時の路線図が掲載されているが、当該の路線は存在しない。なお、一九〇二年の地図には掲載されている。」Vgl. *Pharus Plan Berlin mit Vororten, Faksimile der Originalausgabe von 1902, Berlin 1992.*

(49) Vgl. *FB, S. 22.*

(50) Vgl. *Baedecker, S. 21.* 同時期の別の案内書では、「この路線は、王宮広場からルストガルテンをかずめ、ウンテル・デン・リンデンに入る。Vgl. *Straube's illustrirter Führer durch Berlin und Umgegend, Berlin [1897], S. 160.*

(51) 山下、前掲論文、六九頁。ただし、山下は、「ケーニヒ通りには、鉄道馬車が走っていた（写真が残っている）。豊太郎は鉄道馬車に乗り、クロスター通りで下車したのではないか？」としているが、鷗外の滞在当時、キヨオニヒ街に至る鉄道馬車路線は、モルケン市場経由のかなり迂回的なものとならざるをえない。注四八参照。これは作品論的には採用できない議論であろう。

(52) 前掲『日本近代文学大系』第十一巻、四一八頁。

(53) 小堀、前掲書、四九五、四九六頁参照。

(54) 篠原、前掲論文、二八頁参照。川上、前掲論文、十四頁参照。

(55) 前田、前掲書、二四九頁参照。

(56) もっとも、前田は、マリエン教会説の難点として、それが「古ベルリン地区の繁華な通りの一つだったカイゼル・ウィルヘルム通りに面していたこと」を挙げる。こうした状況認識の不正確さは、本論の示すところである。また、前田は、太田とエリスの同棲地のモデルを「ケーニツヒ街の南手」に求める

のが自然だとし、「この点でクロスター教会説を補強しようとしている。この議論の核心は、キクトリア座（「ケーニツヒ街の休憩所」）同棲地に関する経路の直線的経済性だと思われる。しかし、「ケーニツヒ街の休憩所」のモデルを注七のごとく大陸骨喜店（A）と仮定し、これとキクトリア座（B）、鷗外第二住居（C）の道のりを計測すれば、A B間約七百メートル、A C、B C間いずれも約四百メートルであって、ここで同棲地をC近傍に求めて、キクトリア座から大陸骨喜店に寄り道してそこに戻るとしても、ただか一口強の道のりにすぎない。こうした狭い空間での出来事を経路の直線的経済性だけで片付けることは、かなり難しいと思われる。前田、前掲箇所参照。

(57) 「太田がウンテル・デン・リンデンを過ぎてからクロスター街を通過してモンビジュウ街に帰るという経路は現実にはありえようがなく、状況のフィクション性はこの一事からも推測される」。小堀、前掲書、四九五頁。

(58) 以下の議論では、山下、前掲論文、四九頁以下参照。

(59) 「舞姫」、十四頁。

(60) 山下、前掲論文、四八頁。ならば、ユダヤ会堂もなおさら不都合であろうが。なお、鷗外が、マリエン教会を「パーペン街の」ないしは「カイザー・ウィルヘルム街の」と記しえなかった事情には、美的観点のみならず、当の街路が工事中でいわば実体的に空白であったことも数えてよいだろう。とはいえ、鷗外が持つ『医学都市ベルリン案内』の付属地図には、カイザー・ヴィルヘルム街が書き込まれていた。というのも、この街路名が案内書の索引に記され、地図の位置が示されているからである。Vgl. *FB, S. 204.* 当該地図は、現状で本書に付属して所蔵されていないため、筆者未見。

- (61) 篠原、前掲論文、三〇頁参照。
- (62) Vgl. *Die Grosse Berliner Strassenbahn 1871-1902. Denkschrift aus Anlass der vollständigen Durchführung des elektromotorischen Betriebes*, Berlin 1902, S. 19. ここには、工事開始月が記されていないから、工事による影響の有無は、あくまで推測の議論にとどまる。
- (63) 石黒も鷗外と同日の一八八八年四月一日に転居している。「石黒忠恵日記抄」(三)、竹森天雄編、『鷗外全集』月報三八、岩波書店、一九七五年、五頁参照。第三住居への鷗外の転居は、これとの関連性でも議論されねばならない。
- (64) Vgl. *BA.*, 1887, II. T., S. 340; 1888, II. T., S. 345; 1889, II. T., S. 358. 居住者の変動は、内部改装によるものか。なお、一八八九年版ではプランゲ(Prange)なる靴職人が認められる。
- (65) 「大首座街十番地。(ベルゼ駅近ハアケ市場面)。第三層豪邸七室等賃六百タレル。第四層豪邸五室等賃三五十タレル。第一層大オフィス三(住有無アリ)。委細ノイエ・プロムナード三番地管理人迄」(Gr. Präsidentenst. 10. / (a. Hacke'schen Markt, nahe Börse) / III. Etage herrsch. Wohn., 7 Z. etc., Pr. 600 thlr. / IV. Etage herrsch. Wohn., 5 Z. etc., Pr. 350 thlr. / I. Etage 3 gr. Bureauräume, m. od. oh. Wohn. / Näh. beim Portier Neue Promenade 3.)。 *Vierte Beilage zur Vossischen Zeitung*, 1888/1/18.
- (66) 「賃貸。(中略)市内鉄道駅ベルゼ。大首座街十番地。ハアケ市場角。豪華第三層七室。内四室二世帯用街路面。四月一日賃貸。委細管理人迄」(Vermietungen. ... Stadtbahnhof Börse / Große Präsidentenstr., Ecke Hackescher / Markt, herrsch. III. Etage, 7 Z., davon 4 zweif. / Vorderz., zum 1. April zu verm. Näh. b. Portier.)。 *Dritte Beilage zur Vossischen Zeitung*, 1888/1/4.
- (67) 『ベルリン住所録』によれば、ルッシュ夫人は、一八八四年以前は不詳、八五、八七、八八年は、ノイエ・フリードリヒ街四五番地(八五年の「五五番地」は誤記であろう)で「肌着製造工場」(Waschebrk.)を営む。八九、九十年には、大首座街十番地で「肌着専門店」(Waschegesch.)を営む。Waschebrk.とWaschegesch.は同一実体であろう。九三年以降は、同等のルッシュ夫人で引きえなかった。八六、九一、九二年は、資料未見。Vgl. *BA.*, 1885, I. T., S. 875; 1887, I. T., S. 928; 1888, I. T., S. 951; 1889, I. T., S. 980; 1890, I. T., S. 1027.
- (68) 「独逸日記」一九六頁参照。
- (69) Vgl. *BA.*, 1887, I. T., S. 49; II. T., S. 376; 1888, I. T., S. 50; II. T., S. 382; 1889, I. T., S. 51; II. T., S. 397.
- (70) 「石黒忠恵日記抄」(二)、竹森天雄編、『鷗外全集』月報三七、岩波書店、一九七五年、十頁。なお、中井によれば、引用文中「又森」は「大森」であり、引用文に続き、「大もり之曰は、蒼山氏ブランデン⁽⁷¹⁾ホルクストラーセニ住シ、一月多キ時ハ七百マルクラ収入スト。」とあるとされる。中井、前掲書、二七八頁参照。
- (71) 中井によれば、「ドイツ語の話せない石黒のために、彼(林太郎)は毎週一回蒼山に会い、彼女について知り得たことを石黒に報告していたのだ。それを真面目にやっているか、石黒は蒼山に確かめている」ということになる。中井、前掲箇所参照。石黒は蒼山と何語で会話したというのだろうか。
- (72) なお、ベックは、鷗外が懇意にしていたミュルレル(Mueller)から紹介され

- た可能性もある。ミユルレルは、シャルンホルスト街 (Scharnhorststrasse) 七番地に居住する。「独逸日記」、十頁参照。同地には、プロイセン軍参謀本部付員外学問補助員である文学・法学博士 Eberhard Müller の存在が確認できる。Vgl. BA., 1884, I. T., S. 678; 1885, I. T., S. 709; 1886, I. T., S. 728; 1887, I. T., S. 748; 1888, I. T., S. 767; 1889, I. T., S. 792. 『石黒日記』では、一八八七年九月七日に「佛文翻譯代三十マルクラミユルレル氏ニ拂フ」とあり、ミユルレルとフランス語のかかわりを窺わせている。「石黒忠恵日記抄」(一)、『竹森天雄編、『鷗外全集』月報三六、岩波書店、一九七五年、六頁参照。
- (73) 金山重秀「エリーゼの身許しらへ」、長谷川泉編『森鷗外の断層撮影像』(愛蔵版)、至文堂、一九八四年、三〇一頁参照。
- (74) Vgl. H. Brost und L. Demps, *Berlin wird Weltstadt, Photographien von F. Albert Schwartz Hof-Photograph*, Berlin 1997², S. 226.
- (75) „Hackescher Markt mit Pferdeomnibus, um 1890, Links Hackescher Markt 4, rechts Einmündung der Oranienburger Straße“, in: D. Weigert, *Der Hackesche Markt, Kulturgeschichte eines Berliner Platzes*, Berlin 1997, S. 75.
- (76) H. Koepf, *Bildwörterbuch der Architektur*, Stuttgart 1985, S. 40, 136.
- (77) 「独逸日記」二二八頁。
- (78) „Hackescher Markt 4 (links) und Große Präsidentenstraße 10 (Eckhaus), kriegszerstört, Aufnahme 1950“, in: Weigert, a. a. O., S. 50.
- (79) Vgl. Weigert, a. a. O., S. 140.
- (80) 第三の「下宿の建物は、その後半分だけが残っているが、完全に改装されていて、当時の面影は全然うかがわれない」。篠原、前掲論文、二一九頁。